

## 観 察 と 批 評

( 1 9 1 1 年 2 月 号 )

闇が未だに勝利している。無知と愚かさの背後に立てこもり、長年に亘って司祭と支配者によって養われた人類の敵は、暴虐の限りを尽くし、抑圧し、収奪する。未だに彼等は、あえて殺人しようとしている。時代の最良にして高貴な人をいつも斬殺するのだ。

とはいえいつも処罰がない訳ではないのだ。時どき復しゅうの稲妻が暴君の上に落ち、来たるべき嵐の力強く荒々しい訪れを高らかに警告する。徐々に近接する。それはゆっくりと、人類の信頼に答えるように極くゆるやかに。だが確実に必然なのだ。

闇が未だに勝利している。吸血鬼は人間の血で太り、犠牲者の苦痛に満足する。大きな不安が大衆を感化している。大衆は激動し、煽動され、不平の声は高くなり、その音量は更にふくれあがり、西と東を循環して、両半球の踏みしだかれ落はくした人びとの間で反響を呼び起こしている。

東洋が眼ざめる。イスラムの国から陽の昇る領域まで、不満な奴隷の叫びがあがる。数百万の虐げられ、飢えた民衆が数世紀に亘る眠りから起ちあがるのだ。彼等は熱烈に予言者の声を聞く。生命と自由の新しい福音は、下級労働者達の夜の世界に光と希望を投げかけるのだ。

恐怖が主人達の心をうつ。流血の犯罪は指弾され、時代の不正に手をあげて打ちおろす。恐怖で気が狂い、闇の力は彼等の不義を防衛するのに収斂(しゅうれん)される。予言者が惨殺され、その声は沈黙させられる。ほんの暫くの間。教

会と国家は火あぶりの柱に火をつけるが、それも無駄だ。司祭も支配者も時の針は戻せない。時は動く、時は動いて山頂は明日の曙光で燃えあがるのだ。

われわれの最愛の同志—デンジロ・コウトク、スガノ・カンノ、オオイン博士を殺害した日本政府の恐るべき犯罪は近代史に比較するものがない。闇の力が犯した黒い仕業は、数多く恐ろしい。だが西欧の政府がどれ程横暴だとしても、今日、12名の日本の革命家達を秘密裡に殺害するというような冷血な殺人に訴えるようなことをするかどうかは疑わしい。

日本の支配者達は“文明化”された。彼等は西欧の搾取と抑圧方法を徹底して把握したのだ。実に新改宗者の熱意でもって、ミカドの政府はヘロデを越えるヘロデをもっているのだ。だがニッポンの近代の支配者達は西欧の歴史の教訓を知らない。略奪され、凌辱される民衆の報復者がたちあがるのを認めるには、予言的幻視など不要だ。

人類の最良にして高貴な者が文明の衣裳をまとった野蛮なミカドのあくなき手によってくびられた。だがかようにして新思想と世界征覇の美しい音楽に鼓吹された日本の民衆の熱望を鎮められると希望するなら、それは無駄だ。正義と自由の声を沈黙させる企ては無駄だ。パンと友愛を求める叫びをおとなしくさせようと希望するのは無駄だ。

その企ては文明化された野蛮行為の醜悪さに世界の注視をひきつけたのだ。西欧は日本の恐るべき状況、民衆の不満の成長を発見したのだ、そのようにしてこれまで押しだまっていた大衆の開放の声は、これ程速く広大に行きわたっているのを知ったのだ、その叫び声は世界の革命的プロレタリアートによって聞きいれられた。それは心と心を近づけ、国際的な更生の協調運動を確信するよう団結させたのだ。

## アナーキー万才!

一国の偉大な人びとは、  
死に付される人びとである。

エルンスト・ルナン

(1911年2月号)

悪業が行なわれた。民衆の中の最良にして高貴な者が倒れ、最も悪魔的で野蛮な方法で殺害された。

比べようのない極悪な犯罪が1911年1月24日行なわれた。恐るべき打撃を人類に与え、文明の面前に挑戦状をたゞきつけた。無情な野蛮主義が新思想のバイオニア達を冷酷に縊り殺し、その絶望的な犠牲者達の苦痛に狂喜している。

だがわれらは悲しまない。むしろわれわれの同志達の無実、純粋性、公明正大、忠実、自己犠牲と献身を全世界に表明するのがわれらの仕事である。われらは悲しまない。われらの友は不滅を成しとげたのだ。

新時代が彼等の受難の日をもって、日本を衝撃した。ミカド・ムツヒトの時代は、人間の記憶から消えよう。ブシドウもおとぎ話で神話に過ぎない時も来よう。だが受難したアナーキスト達の名前は、人類の進歩の頁を飾るのだ。大審院の構成員達、人類の高貴な者を執行者の手に渡した彼等は、やがて忘れられよう。だがトウキョウの殉教者達は未来の世代の人びとによって尊敬され賛美されよう。

東洋の革命運動は血の洗礼を受けた。野蛮な支配者は解放運動を絶滅したと考えるのだろう。何という馬鹿げたことだ!彼等は新しい世界征覇の思想の代表者12名の身体を破壊した。そしてその他の代表者達を牢獄に入れ沈黙させた。だが精神は生きているのだ。自由を求める永遠の叫び、精神は沈黙させられず、殺せないのだ。それは存在したし、現に存在し、将来も存在するのだ。精神は勝利

しつづ前進し、いつまでも自由の生命を求めて前進する。

アナーキー万才！この歴史的叫びが極東でその共鳴を得た。それはシカゴの受難者、パリーの、ブエノスアイレスの、バルセローナの、そしてその他数多くの地域での受難者達の唇から唱和された。何世紀にも亘って、各地の暴君と抑圧者を恐怖させてきたのだ。彼等は新思想の先駆者を拷問し、斬首し、電気椅子にかけ、四つ裂きにし、銃殺し、縊り殺した。だがその声は沈黙しなかった。

アナーキー万才！1月24日、12名の新しい犠牲者達の唇から再びこの叫びが発せられた。国際的プロレタリアートの連帯は、榮譽を受けた。西欧と東洋はお互いに見いだしたのだ。

同志達は誇りやかにまた欣然として、死にむかった。アナーキー万才！デンジロ・コウトクが叫んだ。バイザイ（即ち永遠に）は闘争と死の中であって、彼の同志が唱和した。

彼等はわれわれにとって非常に惜しい人びとであった。われらは悲しまない。だがわれわれの心は魅力に溢れたスガノを想うと悲しむのだ。彼女の思い出は長くつづくだろう。愛らしい蓮の花が執行者の手によって荒々しく摘み去られた。われわれは病気で弱り、長年の投獄で傷つきながらも喜ばしげにまた泰然として、自分の死の運命に直面する彼女を見るのだ。「わたくしは自由を求めて生きてきました。そして自由を求めて死ぬのです。自由こそわたくしの生涯です。」かように彼女はサンフランシスコ在の彼女の英語教師に、最近書き送ってきた。

しとやかなスガノ！あなたはサムライの娘だ。あなたの国の衆議院議員の娘で、才能ある作家・著作者でもあったあなたは、ロシアの姉妹達のように民衆の中へ、自己を危険と困難と飢餓にさらしながらそこへ入って行ったのである。彼等はあなたの性格と名前を汚そうとした。ムツヒトのような代表的人物達は自分は雑婚生活を送っている。その息子、明白な後継者は妾の子である。カツラ首相の下僕達、——彼自身は売笑宿の娘を妻に選んだ——これらすべてのご立派な男達が、

愛らしい蓮の花であるあなたを汚そうとした。それはデンジロ・コウトクに対するあなたの友情のためにである。

輕侮すべき悪党どもだ！だが何時の日にかニッポンの国にツルゲネフのような人が起ち、スガノ・カンノの名前はソフィヤ・ペロフスカヤ、ヴェラ・フィンガー、マリア・スビリドノヴァと共に賞賛されよう。

デンジロ・コウトクによって、国際運動はその立派な代表者の一人を失った。彼は極東での社会主義とアナキスト思想の先駆者だった。彼の数多くの翻訳—カール・マルクスの「資本論」ピーター・クロボトキンの「相互扶助論」「パンの略取」「田園、工場、作業場」「青年に訴う」他近代の諸作品は西欧文明に対する日本の真の開眼であった。

デンジロ・コウトクはトルストイに次いで、戦争の厳しい反対者であった。ヘルヴェのように反軍国主義思想の勇気あり妥協を許さぬ推進者だった。日露戦争中、愛国的好戦主義が謳歌された時期に、コウトクはヨロズチョウホウ（萬朝報）に優れた論文で殺人事業をあばく仕事をした。だが予言者の声は荒野に失われた。ビクトル・ユーゴ、マッジニー、ブランキー、バクーニン、マルクス、その他彼に先行した自由の先駆者達と同じく、彼は故国を去り、サンフランシスコで流達の生活をし、ここ、パトリック・ヘンリー、トーマス・ペイン、ジェファソンの地ではワシントン政府の手による新しい迫害を受けなければならなかった。何と恥知らずな不名誉なことだ！

デンジロ・コウトク、スガノ・カンノ、ドクター・オオイシそしてその同志達は、合法的に殺害された。これらの立派な、民衆の中の最も知的な人びと。著作家、医師、人間の友愛の純正仏教哲学の代表者、眼覚めた知的プロレタリアート達、これらの人びとが現代の世界的思想のコン蹟を消し去ろうとの希望によって虐殺されたのだ。

偉大にして勇気ある人びと。われわれは「大地」の愛読者ドクターオオイシの

古い手紙を愛情をこめてもう一度読み返そう。彼は力強い明白な英文で米国の同志達に挨拶を送り、アナーキストの文献を自国の同胞達に配布するよう求めてきた。シンゴークイの敬愛すべき才能豊かな医師は病む人、苦しむ人の多くにとっては歎びと救いをもたらしていた。その彼の唯一の報賞が死刑台であった。

われわれの眼は、ミカドの政府の本当の性格についてようやく開かれた。今になって、日本政府が温めていた不名誉な反逆を知るようになった。われわれは恐るべき計画の意味を完全に知った。ロイター通信社、日本大使館、参事官、特にニューヨークの極東情報局等によって流された虚偽の報道、ごまかし、嘘の根源をたどることができるのだ。東洋の神秘的なヴェールは、一部ひらかれた。文明世界は今やこの受難した同志達の裁判が秘密裡に行なわれたことを知るのだ。被告達は公平な聴取、弁護をはく奪されていた。彼等が有罪を自供したとの主張は、まったくのデッチあげであった。そして外国大使館員の出席のもとに開かれたという公式声明もまたマッ赤な偽りであった。

フランシスコ・フェラーの裁判はこの司法的全体虐殺に比べるとまだ理想的正義があった。ロシアのデカブリストの時代以来、人類は日本政府が犯した程の恐るべき、また記念すべき犯罪は見たことがない。

日本の支配者達は重大事を成しとげるのに成功した。彼等は諸国のリパタリアン分子の憎悪を自己に引き受けたのだ。その人びとは社会解放の偉大な事業に日本の眼覚めたプロレタリアートと共に手を組むだろう。

虐殺はわが同志を殉教者にしただけでなく、不滅の者にした。彼等の血を受けて地球の表面から殺人者とその制度を一掃する反逆者と復しゅう者が立ちあがるだろう。

アナーキ一萬才！

(ヒッポリート・ハーヴェル)

## 野 蛮 な 日 本

F・サコ

“大地”誌の1月号で、同志ハーヴェルは島国帝国における野蛮な状況を詳細に書いた。そこで私は、デンジロ・コウトクと同志の裁判に付き、更に追加したいと思う。

コウトクとその他の者達は去年の秋、反逆罪の科(カド)で逮捕された。だが警察は何らの証拠も得ることができなかった。しかしトウキョウの警察署である警視庁は、スパイと挑発者を使って、幾らかの証拠を作りあげ、有罪者を最高裁判所ではなく、特別法廷に呼びだした。この特別法廷では控訴の機会がなく、裁判は非公開で、15分の弁明の他は何もできないのだった。法廷は100名の警官と兵士によって警備された。コウトク達は政府が任命した弁護人がいたが、1月10日死刑を宣告された。

これについて少し述べてみよう。彼等が逮捕された際、ミカドに対するさような計画が立案されたかどうか明白にすべきだった。

コウトクはトウキョウから60マイル離れたハコネで逮捕された。彼はそこで本を書く為ほんの数週間滞在していたのだ。彼がトウキョウにいた時は、常に警官が監視・尾行し、また彼の郵便物は警察によって押収され、秘かに開封されていた。かような状況では彼ならずとも一私は言うが、誰でも何らかの計画とか秘密の通信または出版なぞ立案できるものではなかった。

コウトクはサンフランシスコのアルバート・ジョンソン、バサデナ在住のレオン・フレイッシュマン、サンフランシスコ及び日本に在る多くの日本人のように、個人的に知っている者には、彼が親切で優しく一匹の蠅さえ傷つけ得ない人であったことはよく判っている。

日露戦争がぼつ発すると、彼は日本の主要な日刊紙から解雇された。それはロシアに対する宣戦布告についてミカドを非難する論文を書いたからだ、彼は強固な戦争廃棄論者だった。その後、彼はワセダ大学教授アベ、マンチョウの編集者であったサカイ、日本の指導的社会主義者S・カタヤマ等の友人達と共に社会主義者の新聞である週刊紙ヘイミンを創設した。この新聞は帝国の当局によって発禁になり、コウトクは4ヶ月刑務所に送られた。

その後サンフランシスコに行き、日本人青年の間で宣伝の仕事を精力的に進め、数百名が社会主義とアナーキズムに転向した。

日本へ帰ってからは、クロボトキンの“略取”を翻訳したが、当局はその発売を禁止した。また彼は“自由思想”と雑誌“わがプロレタリアート”を発刊した。両誌はカツラ首相によって発禁になり、コウトクは逮捕された。

米国で教育を受けた医師S・オオイン博士はトウキョウから400マイル離れたワカヤマ、郷里シングウにいた。そこは鉄道の便がない。オオインは街のりびとの間で金持の社会主義者としてよく知られ、貧乏人からは賢者として賞賛されていた。彼の甥、スチヴンス・オオインは現在ボストンで勉学中である。シングウでは2名の僧侶が逮捕された。

彼等はトウキョウにしようどこにしよう常に警官が尾行し、すべての郵便物は押収されるような状態にあって、一体革命とか反逆のようなことが計画できるのだろうか。

M・モリチカはオカヤマ県在の農業技師で、トウキョウから500マイル離れたオカヤマに住んでいた。幾人かの仲間達はクマモトにいて、彼等はクマモトヒョウロンを発行していた。ここはトウキョウからは700マイル離れている。しかも彼等はみな警察と郵便に関しては同じ状態の下に置かれていた。ところで米国人は日本の現代思想家の状況を正確には知らないにしても、日本政府がどのように社会主義者とアナーキズムを禁止しようとしているかの明白な観念を持つこ

とはできよう。

コウトクと彼の仲間達だけでなく、S・カタヤマ、コセン・サカイ、ニシカワ、キノシタ達は政府によって脅迫され、宣伝をやめるか刑務所へ行くかを迫られている。そこで彼等は書きものの方向を換え、宗教とか純文学のような一般の問題を書かなければならなくなった。ワセダ大学教授アベも当局によって脅迫され、現在では社会改良の道を辿っている。日本では出版と発言の自由はどのような方法にしる全くないのだ。

米国或いはヨーロッパのどこかの国で“パンの略取”または“田園、工場、作業場”の発刊が禁止されたことがあるだろうか。

急進思想の雑誌、新聞、特に社会主義とアナーキズムに関するものは禁止されている。さような出版物が当局に知れると、編集者は一年またはそれ以上刑務所に送られるのだ。諸外国からのすべての印刷物は郵便物の状態で開封され、当局が検査する。手紙ですらそうである。これは萬国郵便規約を破るものだ。

私は人間性の友人達が日本の野蛮な現状を理解し、これが現代思想に対する直接のまた強力な挑戦であることを理解されるよう希望する。そうすれば日本は、自国を文明国と呼んではいるが、事実は貴族主義の専断な君主国であるのが判るに違いない。

この手紙の終りにあたって、私はコウトクの裁判に関連した恐ろしく悲しい物語をしなければならない。

コウトクの母は70才で、コウチートサの生国から只一人の息子に逢いにきた。裁判が終る少し前に当局の出席の下で会見が許された。老女は厳格に息子に呼びかけサムライ、往時の戦士のように死に直面するよう訴えた。

この会見は短かった。彼女は息子に勇気をもと訓戒して一滴の涙も落さなかった。母は家に帰り2日後に死んだ。法廷で最終宣告を聞きつつ、コウトクは母の死去を告げる電報を示された。かように所謂文明国は世界の面前で殺人を執行

したのだ。

宣告が言渡されると、有罪者すべてはバンザイノと叫んだ。これはアナキー万才である。

かくて日本のフランシスコ・フェラーは数日中に絞首されよう。

\* \* \*

## コウトクテモ

日本政府の恐るべき犯罪——デンジロ・コウトクと同志の合法的殺人——は全世界のリバタリアン主義者の比べものない憤激をひき起こした。ヨーロッパと全米では、人間性の良心を持つ人びとが日本政府の野蛮性と野蛮主義及び兇悪な非人間的方法を一致して非難している。

進歩的人びとは民族、党派、革命家、急進派、知的プロレタリアの別なく、12名の日本のアナキスト・社会主義者の政治的暗殺に抗議する為、手を組んだのである。至る所で人間性に対する挑発は、進歩的人びとによって問題にされている。スイスとフランスのフリーメーソン支部、医療集団の構成会員、労組、サンジカリストの諸組織は共通の場に会合し、一致して合法的殺人を非難すると共に国際プロレタリアートの連帯を表明した。

米国では最大の意義深い集会在1月29日月曜日、ニューヨーク、ウェブ・スタートホールで行なわれた。この大衆集会是コウトク抗議協議会と呼ばれ(各方面の急進・労働組織を代表している)2000名を越える人びとが、次の決議によって革命的プロレタリアートの感情を代弁した。

それ故、これらの同志の唯一の犯罪は、民衆に科学的思考をすすめた努力であり、人びとに労働者の悲惨と品位の低下を育くむ社会組織てんぶくのための運動